

鎌倉時代の領主

毛呂季光 ものがたり

くすえみつ、「毛呂」を名のるく

昔々、平安時代、京の都に藤原季

仲という貴族がいました。藤原季仲の家

は、天皇家の親せきにあたる「小野宮家」

の一族で、九州の大宰府という役所で

外国とのやりとりを監督する大切な役

をつとめていました。



ところが、ある日、その大宰府（今の福岡県太宰府市）で事件がおきました。

「季仲殿の家臣が、日吉社の役人をきつて

神輿をこわしたらしいぞー！」

その罪で、藤原季仲は、はじめは周防

国（今の山口県）に、その後常陸国（今

の茨城県）に流されてしまいました。（注1）

当時、貴族が都の京をはなれることは、とてもたいへんなことでした。

季仲の事件があったからでしょうか、息子の

季清や、孫の季光も京ではなく、毛呂にすむ

ことになり、地名をとって「藤原」から「毛呂」と名のることにしました。



わたしは「すえみつ」

もとは藤原というが、

これからは「毛呂季光」じゃー！

このお話はお寺に伝わっている伝説をもとにしてつくりました。このような伝説が残るほど季光はすばらしい人だったのでしょ。

ある日、季光は今の毛呂山町阿諏訪の山に鹿がりに行きました。すると、急に空がくもり、大きな雷がなって、まっくらになったかと思うと、大雨がふりだしたのです。

じい、鹿はどこじゃ？

すえみつさま 季光様、なにやらひどい雨になってきましたぞ



(注1) 藤原季仲（1046～1119）は、堀河天皇の重臣。1102年、大宰権帥に任ぜられるも1105年日吉社神人殺害の訴えにより配流された。（『大日本史料』）

あめ
雨はまもなくやみ、サーッと空が晴れてきた
おも
かと思うと、季光たちの頭の上に光るものが
と
飛んできました。

「なんと、あやしい光！ 矢で落とそう！」
かしん
家臣があわてて弓をとり、光を射おとそうと
しましたが、別の家臣が止めました。

「さてー！」
よく見るとその光るものは、都から季光のこ
とを追いかけてきた春日明神だったのです。



すえみつどの しんばい
季光殿が心配で
と飛んできました

かすが
これは春日
みょうじんさま
明神様！

がりゅうざん お
臥龍山へ落ちたぞ！
みなのもの、いこう！

かすがみょうじん ふじわらけ
春日明神は藤原家を守る神様です。藤原家
しゅつしん すえみつ
出身の季光を心配して都から飛んできたの
です。

そして、その光るものは毛呂の臥龍
さん うえ と
山の上に飛んでいき、飛来大明神（今
いずもい わいじんじや
の出雲伊波比神社）となって、毛呂家や
もろ
毛呂の人々の守り神となったのです。



やがて源頼朝という武士が鎌倉
みなもとこのよりとせ
に幕府を開き、武士による政治が始ま
るころ、季光にも知らせがきました。

「頼朝殿が鎌倉のやしきに入ら
よりとせこの かまくら
れるので、大パレードをするそう
だ。三百人もの武士が来るらしい。
私も来るようにといっている」

一一八〇年、源頼朝が鎌倉
ねん みなもとこのよりとせ
のやしきに移るためのパレード
に、季光も参加することになりま
した。頼朝は、



「季光殿、あなたは藤原家の一族
すえみつどの ふじわらけ いちぞく
ですから、私のすぐそばで…」
といい、季光は、頼朝のとなり
でおともすることになりました。
その後、おだやかで賢い人が
すえみつ よよとせ
らの季光は、頼朝に大切にされ、
季光も頼朝に一生けんめいづく
しました。

(注 2) 1180年、頼朝が大倉郷の新郎に入る際、頼朝の御駕の右に毛呂季光を置いた。その後も季光は頼朝が没するまで多くの場面で随行している。〔吾妻鏡〕

※このお話は「長昌山龍穩寺境地因縁記」(天文 12・1543) に記されている内容をもとに制作しました

※本紙の挿絵と文は著作権で保護されていますので無断転載・転用できません

挿絵: 中村郁恵作画 制作: 毛呂山町歴史民俗資料館

住所: 埼玉県入間郡毛呂山町大類 535-1 電話: 049-295-8282

